

---

# 幽霊相手に日々奮闘中!?

萩原あきこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽霊相手に日々奮闘中！？

### 【Nコード】

N2701F

### 【作者名】

荻原あきこ

### 【あらすじ】

なんで…俺がこんなことしなくちゃいけないんだあゝ！？いきなり幽霊退治？俺の平凡な人生を返しやがれゝゝ！！

## ブログ

「ふざけんなあゝ！？俺は…視えたって何も面白くねえんだよゝゝ  
！？」

俺の叫び声が事務所に響き渡った。

影柳さんと靖史さんはニコニコ笑いながらも、うるさそうに耳を塞いだ。

俺は…俺はだなあ！？

平凡な人生を送りたいんだあゝゝ！！

- - - - -

両親の影響で小さい頃から幽霊が見えていた俺、カブラギ 蕪木 ソウタ 蒼太

俺は高校生にもなり、幽霊なんかと関わらないように平凡な人生を送るつもりだったのに…。

いきなり

「GB」とか書かれてる看板の事務所に連れてこられて……!?

【1】俺は幽霊なんか信じない！

「なあ、幽霊って信じるか？」

俺はダチである木更津直樹のそんなバカらしい質問に即答した。

「信じねえよ、バカ」

「なっ……！？バカとは何だ、バカとは！？」

「うるさい、耳元で叫ぶな」

あまりのうるささに俺は耳を手で塞いだ。

「バカなもんはバカなんだ。潔く認めろ、私はバカですってな」

「なんだとお！？いいか？バカって言う方がバカなんだ！覚えとけ  
！！」

うわぁ……。

言っちゃったよ……。決まり文句言っちゃった……。

「小学生じゃあるまいし。まだそんなこと言ってるのか、バカ？」

俺がそう言つと、直樹は猿みたいに  
「むきー!？」と叫んで、1人で勝手になんか喋っていた。

もちろん俺はガン無視。

まったく…迷惑したらありやしない。

因みにここは、放課後の学校の図書室。

もちろん他の生徒や担当者の先生がいるわけで……。

「こら、そこ!？」

そんな怒声に直樹の動きが止まる。

直樹は恐る恐る後ろに振り返って、青ざめた。

「ゲッ……ババア」

直樹がボソツと呟いた。

ババア… まあ、そのままだけど……。

江田洋子（50歳）

図書室担当の先生だ。

はっきり言つと、口うるさく、あまり生徒には好かれていない。

「ここは図書室ですよ！？周りの迷惑になります。静かにしなさい  
！！」

ババアの怒声に、勉強をしていた何人かの生徒が迷惑そうに顔をしかめた。

お前がうるさいよ、ババア……。

と言つてみたい。  
が言わない。

言えば、更にあのうるさい怒声がパワーアップするから……。



「あっ……」

俺はあることに気付いた。

幽霊なんて信じないなんて言うてはみるものの…。

やっぱり……。

「気付かないようにしてたのに……」

俺はそう呟いて、溜め息つき、ババアの後ろを見た。

女が立っている。

髪の毛がやたらと長い。

だらしなく垂れた髪の間から覗く、妙に光を放つ気味の悪い瞳。

じっと、ババアを見つめている。

ババア…なんかしたのか？

な…んてな…。

女なんていないいない！

いるわけねえじゃん。

幽霊なんてさ…。

俺は幽霊なんか信じない！？

【2】綺麗なお姉さんとイケメン（死語）なお兄さん現る！？

「あゝきつつ…」

俺はボソツと呟いて、学校を出た。

今日も途方もなく平凡な1日だった。

でも俺は平凡が嫌いじゃない。

しかし……。

ウザいな…。

「…寄ってくんな」

俺はそう言って、空を睨み付けた。

「君、幽霊視えるの？」

「は……？」

そんな声に振り返れば、そこには綺麗なお姉さんとイケメン（死語……）のお兄さんがいた。

「えと……今なんて？」

「だから、君、幽霊見えるのって？」

お姉さんは俺に顔を近づけて、ちよつとむつとしたような表情でそう言った。

幽霊…？

幽霊って言ったかこのお姉さん？

幽霊…？

「ハハハッ…幽霊なんているわけないじゃないですか」

俺は苦笑いしながらもそう答えた。

「ホント？」

お姉さんは更に顔を近づけてくる。

「ほっ…ほんとですって…！？」

あまりの顔の近さに、俺は少しドキドキしながらもそう答えた。

「ふん…じゃあ、そこにいる幽霊はどんな姿してる？」

「えと…中年サラリーマンですか……………っ…！？っていやいや今は激しく違いますよ！？」

何答えちゃってんだよ、俺…！？

「やっぱり…視えてるんじゃない？嘘はいけないわよ？少年」

お姉さんはそう言って、怪しく笑うと俺から離れた。

「いや…あのですね……………今のはきつと間違いで…」

俺はしどろもどろになんとか言い訳しようとした。

「間違いなんかじゃねえぞ？お前が言ったことは当たってる。そこ

には間違い無く中年サラリーマンがいる」

お兄さんが初めて口を開き喋った。

お兄さんは空を見つめて、目を細める。

ハスキーな声だ。

この人モテるだろうななんて……考えてる暇ないだろ、俺！？

「いや……あゝもう……何なんですか、あなた達！？」

俺は何故かキレてしまった。

幽霊なんかと……幽霊なんかと関わらないように生きていたかったのに……。

この人達の所為で台無しだ！



「…俺は幽霊なんかと関わらないようにしてきたのに!？」

「ふん、そうなの？」

お姉さんは興味なさそうに、長い黒髪をかきあげる。

「そつ…そうですね!大体誰が幽霊なんて信じるんですか!？幽霊なんか視えるなんて言っただけで誰か信じてくれるんすか？それこそ変人扱いすよ!？」

俺がそう言つと…。

「いつから幽霊は視えてるの？」

完璧無視なお姉さん……。

「…って!人の話聞けよ!？」

「で、いつからなんだ？」

お兄さんはニヤニヤしながら聞いてくる。

あなたも無視しますか…。

たくっ……。

「小さい頃からですよ…。大体3歳ぐらいからかな？流石にそれが幽霊とまでは認識できませんでしたが……たぶん幽霊が視えるのは両親の影響ですよ…」

俺は仕方なく答えた。

「へえ、両親…。ご両親も幽霊が視えられていたの？」

お姉さんはどこか感心したように聞いてきた。

「みたいですね。今はもうあの世で仲良くやってると思いますよ」

俺はもう投げやりにそう言った。

「そう…。君、名前は？」

お姉さんはニッコリと微笑む。

「蒼太…蕪木蒼太です」

「蕪木…？ホントに？」

お姉さんが“蕪木”という名に、妙にくいついてきた。

「はっ……はい」

「そう……。蕪木……ね。靖史……これ、ビンゴなんじゃない？」

お姉さんは怪しく笑い、お兄さんを見た。

「かもなあ。でもまだはつきりと決まったわけじゃないし……。とりあえずは事務所に連れていきますか？」

お兄さんはそう言って、俺の肩に手を置いた。

ああ……母さん、父さん……俺は変なお姉さんとお兄さんに捕まってしまう……。しまった……。

「ではでは、ようこそ蒼太君。我が“GB”へ」

って…あれ!?

いつの間に学校からこんなところに!?

狭い路地を抜け、たどり着いたのは…古ぼけた建物だった。

なんかだっさい…GB……?と書かれた看板をぶら下げて…。

何なんだよ…ここ?

「ほら、ほら、入って入って!」

階段を上り、なんか勝手に招き入れられている…。

「…って…勝手に連れてくんなよ!?!」

俺は思わず叫んでしまい口を手で塞いだ。

ここが俺の今までの人生にピリウドを打ち、新たな人生のハジマリとなつた場所。

つか……勝手に連れてくんなあ~~~~!!?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2701f/>

---

幽霊相手に日々奮闘中!?

2011年1月15日02時57分発行